

はじめに

考古学専攻学生の昭和50年度夏期実習調査を阿蘇町で実施した。同町を実習場にしたのは、ここに本学の宿泊施設があり、付近に手ごろな遺跡があったことにもよるが、最大の理由は、同町教育委員会がこの企てにひとかたならぬ御厚意をお示し下さったことによる。実施に際し、文化財関係予算の一部を御都合下さり、教育長自ら調査現場に来られて学生たちを御指導下さった。

御厚意にお応えするには、学生たちが実習の実をあげる事が第一であるが、それに次いで、阿蘇町古代史のよい史料になるような報告書を提出する責任があったはずである。

ところが、報告書を作りあげ、図版を揃える段階になって調査フィルムの紛失事故に遭った。写真業者と大いに争ってみたが埒をあけることができなかった。協同の工房に注文品を集めて処理する現在のシステムの中で齟齬が起ると、現品は50万都市の底に沈み込んでしまい、どうにも回収の仕様がないらしい。

このような次第で報告が非常に遅れてしまい、しかもその写真はスナップを寄せ集めたものであるから甚だ出来が悪い。本文の内容をうまく説明できるものが集まらなかった。残念である。教育委員会の皆様にも心からお詫び申しあげたい。

昭和51年1月20日

白木原和美

阿蘇町塔ノ木古墳群ドンベ塚

I. 塔ノ木古墳群

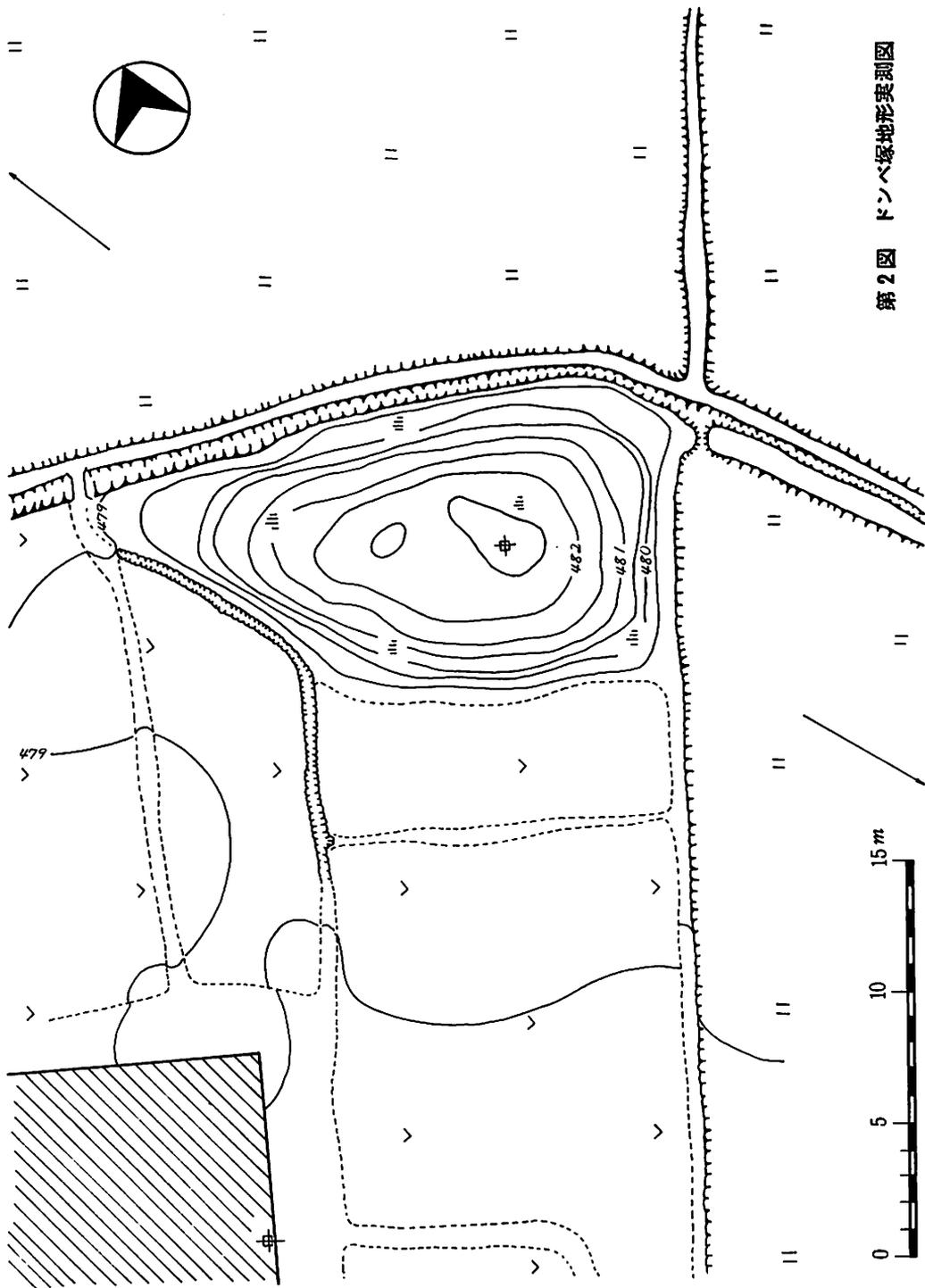
阿蘇町大字小里字原口には古墳乃至古墳址が点在し、塔ノ木古墳群と通称されている（第1図の①）。同町教育委員会の調査で、墓地に使用されているもの2基、痕跡だけとどめているもの3基、古老の記憶にあるもの1基、の計9基が知られている。所在・所有者・概況を一覧表で示すと次のようである。

塔ノ木古墳群

古墳名	所在地	所有者	現状
塔ノ木 1号墳	大字小里原口 314	小野家	墳丘が小野家の墓地になっている。
” 2号墳	” 315	白石家 長門家	墳丘に白石・長門家の墓地がある。
” 3号墳	” 323	島津保	邸内にあり、墳丘が残存する。
” 4号墳	” 325	奈須親	周囲に茶を植え、中は畑になっている。
” 5号墳	” 330	三井一義	長楕円形の芝原である。
” 6号墳	” 334	岡本義一	茶畑になっている。
” 7号墳	” 338	木村真吉	昭和20年頃まで畦畔に花筒を備えて供養したが、現在痕跡なし。
” 8号墳	” 343	井野忠治	石室の石材が残存している。
” 9号墳	” 360	楠時雄	戦後田圃に拓いたが、供養に小塚を残してある。

〔「阿蘇町古代遺跡」阿蘇町高齢者学級14号（昭50）による。〕

古墳群は内ノ牧の街区を北に出はずれた水田地帯の中にある。このあたりは南側の黒川と北側の花原川（kabarū-gawa）に挟まれた地域で、両河谷との落差が大きく、灌漑用水路の構築以前はむしろ高燥な場所であったと推定される。



第2図 ドンペ塚地形実測図

Ⅱ．ドンベ塚 (第2図)

古墳群のうち、ただひとつマウンドを残しているのがドンベ塚(塔ノ木古墳群第3号古墳)である。全群の中央やや西寄り、島津保氏の邸内北隅にある。地籍は大字小里原口323番地である。

プランは東西にいちじるしく長く、長径21m、短径11m、頂部の標高482.5m、平坦部との比高約3mである。東・南・北の各斜面は急峻であるが西斜面はなだらかであり、頂部は平坦である。

はなはだ不整な形をしており、出土遺物についての伝唱もない。しかし斜面の崩落部の所見結果ではこのマウンドは明らかに人工による積み土である。

付近は一面の水田地帯であり、近隣家屋の敷地も満水時の水田面とほぼ同じレベルである。山を崩して敷地に使用することはあっても、地表を削って土を1ヶ所に集めて積み上げる必要は見出し難い。「塚」の伝唱通り、小規模ながら高塚古墳であることは疑えない。(山本)

阿蘇町^{おんづか}御塚横穴群A・B穴

I. 御塚横穴群

内ノ牧の北側は外輪山の内縁が湾入して袋状の水田地帯になっている。その東南部は大観峯の西南崖の直下に当り、平地との接線は西に開いた小さな谷によって折かれ不整な鋸歯状を呈している。御塚横穴群はこの谷のひとつ、阿蘇町大字宮原字前田にある（第1図の②）。付近一帯に杉が植林されているが、南斜面の平地に近い部分は階段状に均らされており、嘗て耕地であったことを示している。この階段状の旧耕地には、崖面に栗石を嵌めこんだ個所が散見される（第3図の矢印に示す）。隙き間から針金を挿入してみると内部はいつでも空洞である。この部分に東西方向に並んでいた横穴を掘り崩し、開口部に石を積んでふさいだものと思われる。

この横穴の列の北10m、上方5mほどの所に、下の横穴列とほぼ平行する形で2基の横穴が開口していた。西をA穴、東をB穴とし、今回の調査の対象とした。A穴の西側に計3個の小さな凹地（第3図、a・b・c）があり、ボーリング棒を1m以上挿入しても堅い土壤に当たらない。横穴が陥没したものである可能性が高い。また下列の横穴の頻度、上列の凹地の様子などから、A・Bの間に更に1基乃至2基の横穴の存在が予想される。更にBの東方には踏むと空洞音を発する地点がある。

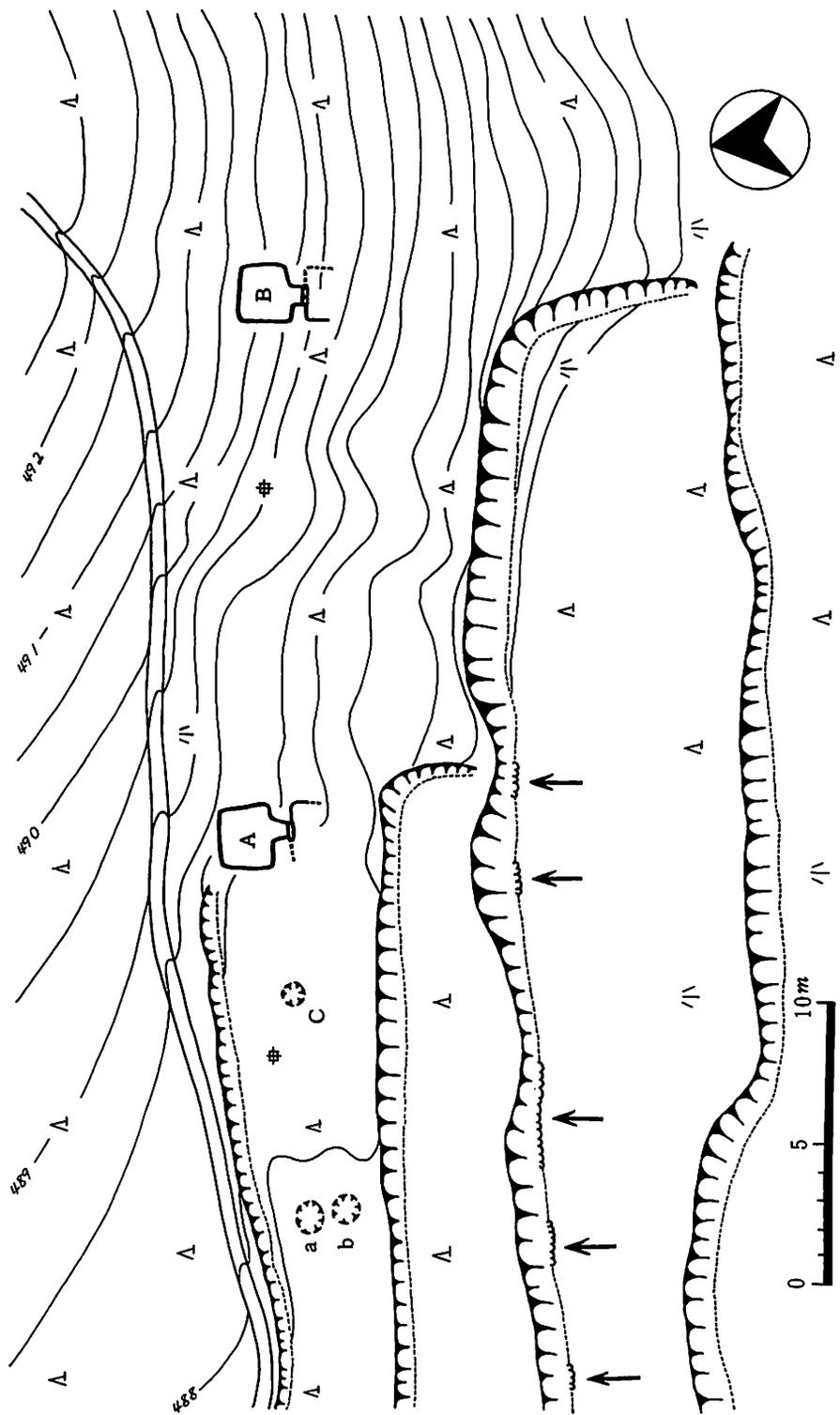
以上のことからこの付近には少なくとも10基以上の横穴が東西方向に上下2段、南に羨道を向けて並んでいたと推定される。この際、付近の旧地形が崖面乃至それに近い急斜面ではなく、畑を拓くことが可能な程度の緩やかな斜面であったことは注目されてよいと考える。

なお、阿蘇町教育委員会の調査では、明治のころ山麓の開墾が進んだ際に鎧の胴のような形のもの、馬の鞍のようなもの、壺、などが出土したという伝唱がある。（平野）

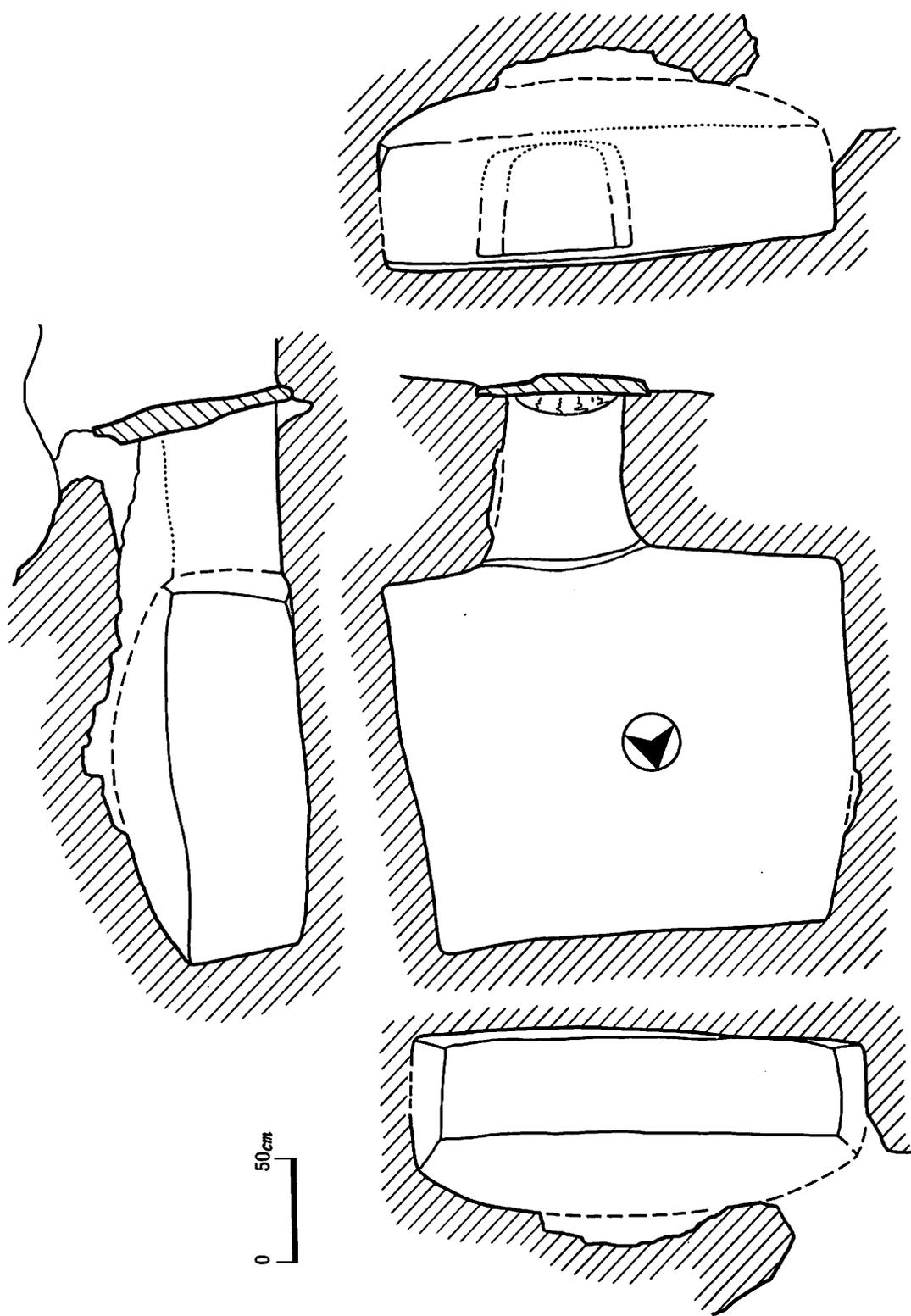
cf. 「阿蘇町古代遺跡」（阿蘇町高齢者学級14号） 阿蘇町教育委員会 昭和50年5月

II. A穴

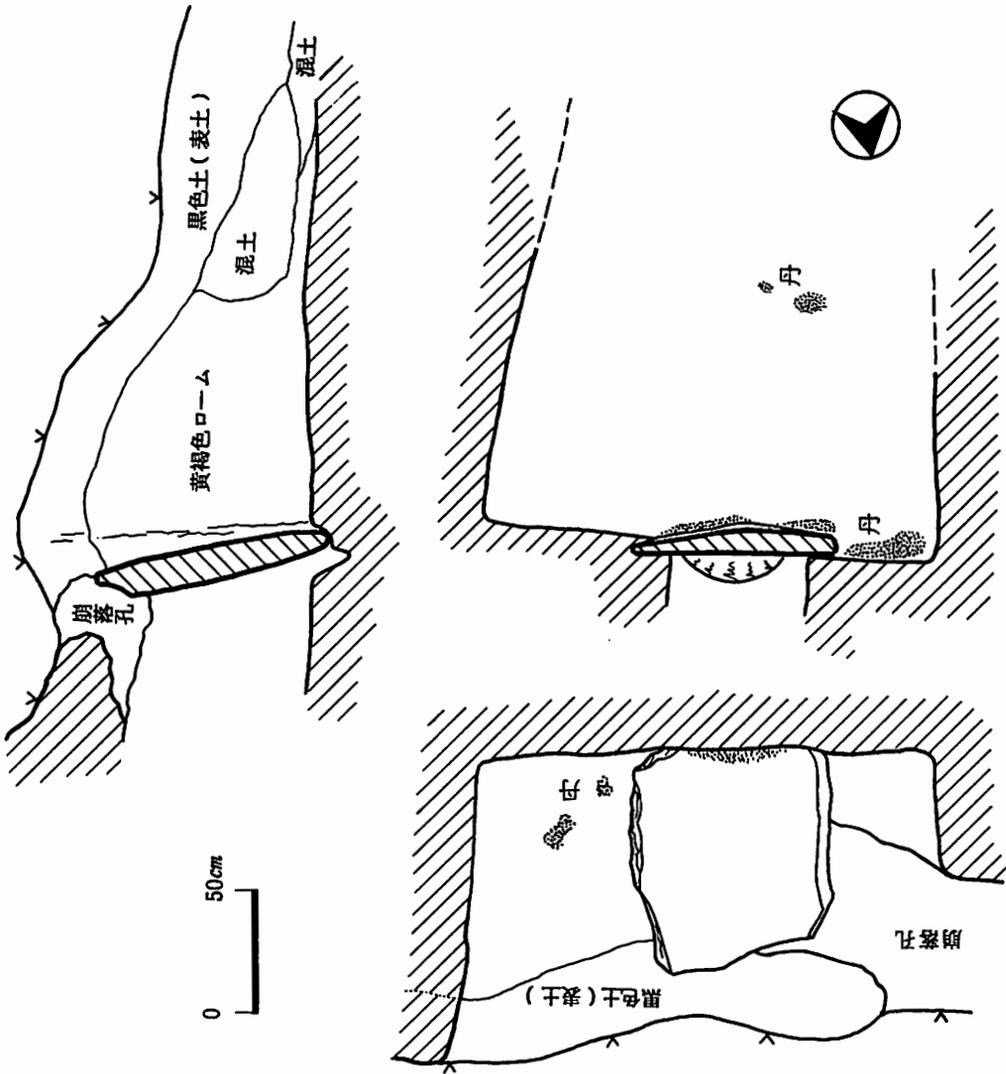
昭和25年ごろ耕作によって西壁の大半が崩れたために発見され、刀子・ガラス玉・人骨が採取されたという。以来現在まで開口したままである。なお、A穴の上は丸く盛り上っており、あたかも小円墳の観を呈するが、A穴掘削当時の地形であるかどうか不明である（図版II）。



第3图 御塚横穴群地形实测图



第4圖 A穴実測圖(玄室・狭道)



正方形に近い玄室と板石で塞いだ短小な羨道を持ち、両壁のある前庭部を造りつけた型に属する。穴内各壁面の接線を際立たせる努力が認められるが、構造は厳格さを欠き、全体として著しく不整である。

a. 玄室・羨道（第4図）

玄室の床面はわずかに東が低くなっている。四壁はいづれも外に張り出し気味に傾いている。天井は北半分が崩れ残っているが、四柱・切妻などを示す稜線は見当らず浅い皿型であったことがわかる。床面から天井まで約90cm。

羨道は南壁のやや東寄りに穿たれ、玄室より約5cm高い段落によって画されている。天井はほぼ全面的に剥落しているが、残在部の様相と閉塞石の形などから、アーチ形

であったと推察される。

玄室・羨道・閉塞石内面ともすき間なく丹で塗り込められている。付近に丹の産地として有名な赤水をひかえているためかその量は豊富であり、開口後20年以上を経、多くの人々の見学が続いた現在でも床の土と混和せず、湿気を帯びると踏み滑るほどである。

壁・天井とも工事の痕が残っており、それによると掘削具の刃先は幅15cm前後の角の円い方形を呈したもののようである。掘削の方向は一定していないが、縦方向がやや優越している。

壁・天井の丹は例えば簾のような腰の強い大形の刷毛状のもので粗く塗られており、ハケ目の残ることを意に介した様子はない。丹の粉末は粘性を持たないにかかわらず、捻り着けたような状態で壁・天井に固着しているため、何らかの添加物と練りあわせたものと思われる。なお床は踏み荒されているため、丹を塗布するについての詳細は不明である。

玄室からの出土品は前節に述べた刀子・ガラス玉のほか、本調査によってガラス小玉11箇が発見された。このうち10箇は排土を水洗して得たもので、出土部位不明。1箇は玄室西南隅（第4図の×印）より検出された。

b. 閉塞石・前庭（第5図）

閉塞石は板状に割った石の四囲をわずかに打彫して整形するにとどめてある。地山を石の下縁の形に掘り凹めて枨（ホゾ）を作り、板石を嵌め、羨道の上縁に寄せかけてある。この石の下縁内側に接して半月形の掘り込みが発見された。しかしその幅は石の下縁の幅より小さいので、枨を切り直した痕と速断することはできない。

閉塞石は内側に18ないし19度傾斜しており、この傾斜は穴の正面外壁の傾斜とほぼ一致する。正面外壁は閉塞石の東側に幅約90cm残存しているが、閉塞石の嵌め込みのための加工に類する特別なものは見当たらない。表面に少量の丹が発見されたが、塗布されたものか、たまたま付着したものか不明である。

前庭部は地山を掘り割って造られており、両壁は垂直に近く、且つ穴の外壁とほぼ直交している。幅は閉塞石付近で約185cm。その床面は羨道の床面と同じ高さで続いているが、150cmほどしか追跡できないので詳細は不明。なお穴の西側の外壁・閉塞石の下をはじめ床面の所々で丹が検出された。また前庭部に填った土が、汚染された

流入土ではなく、純度の高い黄褐色ロームである点が注目された。後述のB穴同様、前庭部の埋め込みによる閉塞の可能性を示すものである。(柴尾)

Ⅲ. B穴

A穴の東方約20mの所にあり、1.5mほど高い位置にある。A穴とB穴を結ぶ線は下段の崖面の栗石で塞がれた横穴群とほぼ平行する関係にあるので、両穴は同列のものと思われ、高度差に特別な意味はないようである。昭和46年夏、雨天が続いた際に陥没して発見されたという。玄室天井部が径1.5mほど抜けて落ち込み、室内は土で充填されていた。なお、B穴の上は、その部分だけがフラットである。つまり、傾斜面にあって、B穴のあたりだけが全体としてテラス状に張り出しているのである。A穴の状況と関連する可能性がある。(図版Ⅲの下)

A穴と同じく正方形に近い玄室に短小な羨道を設けて板石で閉塞する型に属している。各壁面の接線を鋭く際立たせる努力が認められはするがその構造が厳格さを欠く点も、A穴と同様である。ただ、前庭部の様相が異なっており、しかも屍体の搬入後に閉塞石を立てることは勿論、前庭部全体を埋め込んで密閉した可能性のある点が特に注意された。

a. 玄室・羨道

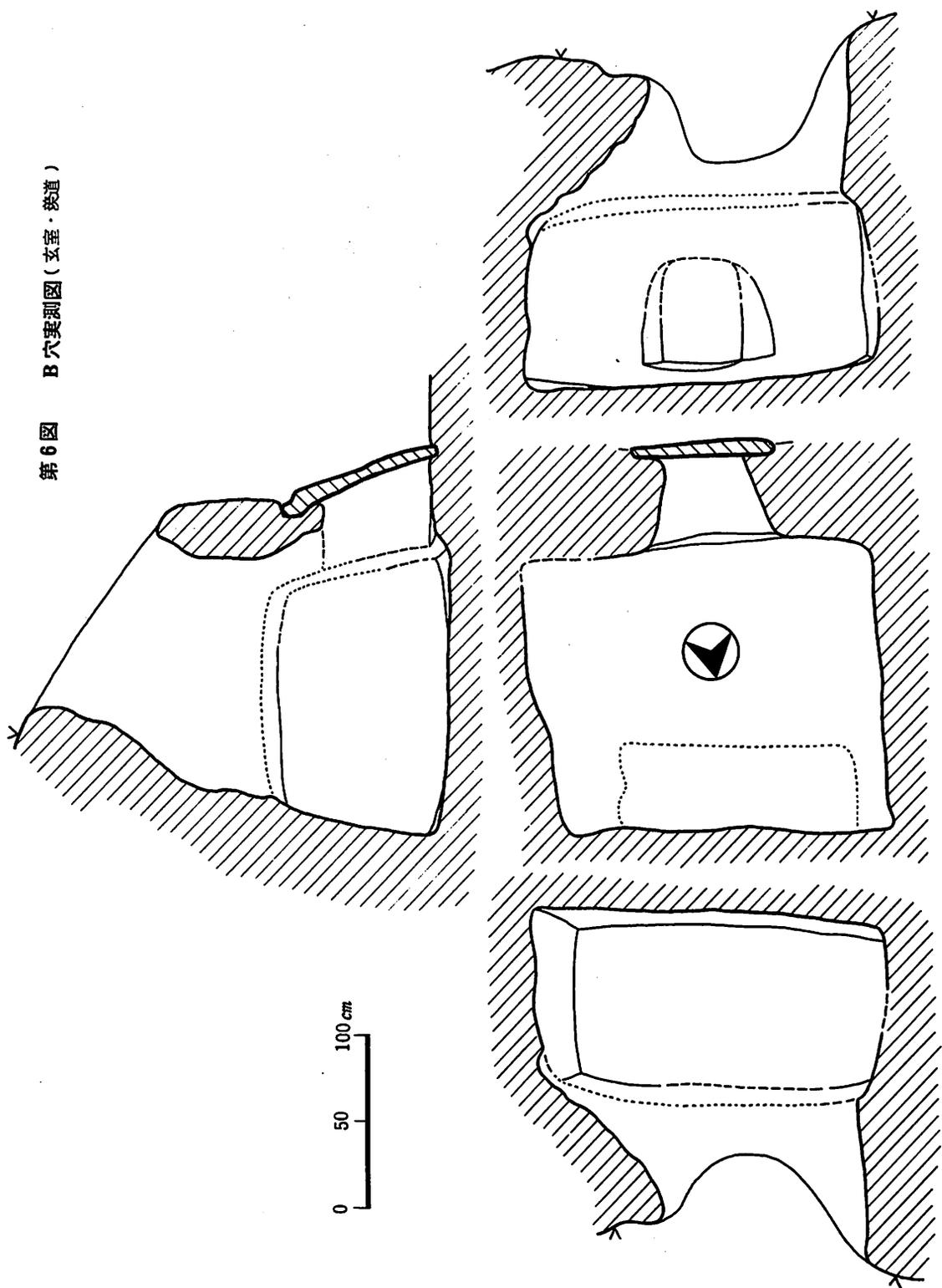
玄室の床面には浅い凹凸があり、さほど入念に均らされてはいない。四隅がいくらか高いため、極く浅い皿状を呈しながら全体として東南方向に低くなっている。プランは正方形を目指したもののようであるが、歪んで平行四辺形に近くなっている。

四壁は内傾している。天井は落盤のために細部について不明であるが、平天井か若しくは平天井に近い皿状であったように思われる。なお高さは最高部で1mを越えているらしく、A穴に比べて約10cm高い。

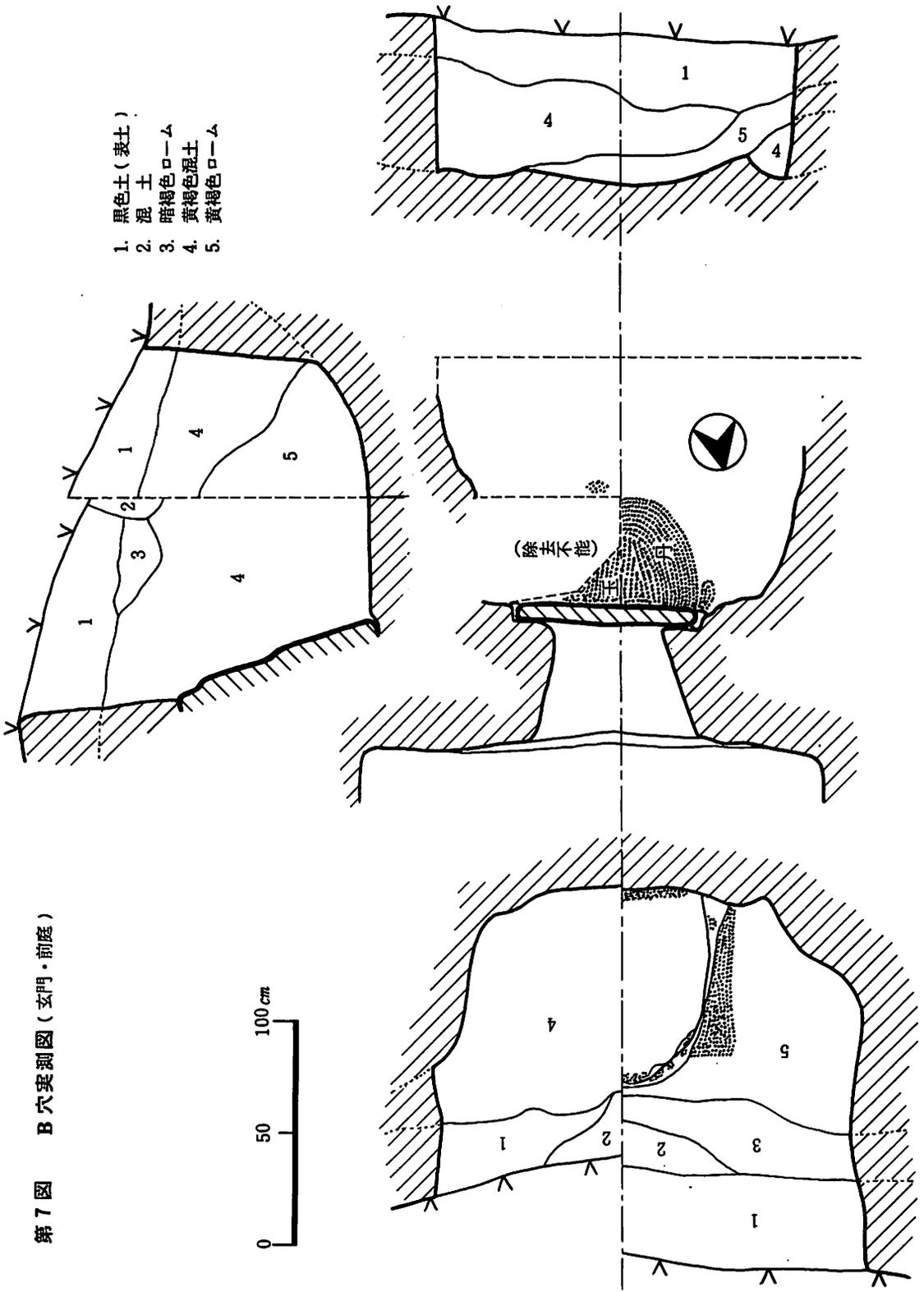
羨道は南壁の中央わずかに西寄りに設けられ、玄室より約8cm高い段落によって画されている。閉塞石近くの天井が崩れ残っているが、その高さで推定すると玄門の上にも南壁が30cm以上あったらしく、この点はA穴と趣きを異にしている。

内部にすき間なく丹が塗られている点はA穴と同様であり、掘削に用いられた工具や丹の塗布に用いられた道具もA穴とほぼ同様のものである。ただし、仕上げの際に掘削具をなるべく水平方向に振って壁面の粗い印象を少しでも和らげようとした意図がうかがえ、丹の塗布に当っては櫛がけにクロスさせながら工具を動かしたことが看

第6图 B穴夷测图(玄室·装道)



第7圖 B穴実測圖(玄門・前庭)



取された。

丹彩を施すについて壁・天井と床面とで方法に差があったことが推定される。壁・天井の丹彩は固い被膜の様相を呈しており、あたかも凝固しかけた澱粉糊を無理に伸ばした時のように、粒状の塊が刷毛目にそって固着している（図版Ⅴの上）。発色もあまりよくない。

これに対し、床面の丹は厚さが厚く、部分的には1cmに達する所もある。乾けば粉末状になり、発色はよい。これは前者が粘着する物質と丹を混和して簞のような腰の強い刷毛状の工具で塗布されたのに対し、後者は丹そのものを撒布したことによると思われる。

壁・天井の丹が重ね塗りされた様相は見当らない。おそらく、築造時に一度だけ塗布されたものであろう。床面の丹の厚さについては、葬礼に際して複数の人が入れかわりに丹を撒布した — あるいは葬礼の度に新たな丹粉を投じた — などのことが考えられる。

なお、奥壁に接して幅60cm・長140cmの長方形の部分の床が他と異なって固いことが注目された（第6図の床面の点線部）。この部分の丹の表面は他の部分と特に異った点はないが、丹の下面、つまり地山の面はわずかに凹んでいる。屍体の安置に際して凹凸を均らした痕であるかも知れない。

玄室の西南隅に近く、丹層の中からガラス小玉計87個がまとまって検出された。排土作業によって床面が踏まれているので多少の不確実さを残しているが、葬礼の度に丹粉を撒いたために丹層に封じ込まれた可能性が高い。なお、作業の足場が極端に悪かったため、配列等の詳細は追求できなかった。

b. 閉塞石・前庭（第7図）

閉塞石はA穴と同じく板状の割石の四周を粗く打彫したものである。ただしA穴のものよりやや入念であり、下辺は直線状に、上辺は半円形に近い（図版Ⅳ）。

穴の出口には閉塞石の形と厚さに合わせて凹みが造られ、その下に柄が掘り込んである。閉塞石はこの凹みと柄に嵌め込まれている。凹みと石との隙き間には粘土が詰められ、その上に丹彩を施してある。石の傾斜 — 従って穴の外壁の傾斜は約22度である。

（注）実測図（第7図）では閉塞石より上方の壁が垂直に近くなっている。崩落をさけるためこ

こで作業を中止したものであり、羨門付近の羨道部天井の土層を示すものではない。

前庭部の様相には特異な点があり、はなはだ興味深いものがあった。しかし植林した樹木の除去が許されず、図や写真なども難解なものにならざるを得なかった。

閉塞石近くの前庭部は地山（黄褐色ローム）を不整な槽状に掘削して造形されている。床面は羨道の床面とひとつづきの高さであり、幅1 mほど平たく、その左右は弧状に立ち上り、やがて垂直に近い壁に移る。両壁の距離は3.7 mほどである。

丹彩は閉塞石の周りに詰めた粘土に認められる他、閉塞石のその他の部分、羨道外壁、前庭床面にも認められた。特に羨道外壁西側の閉塞石に接する部分の丹彩は方形の一部分であるように見えるし、閉塞石直下の床面のものは半円形に見えるが、意図的なものかどうか不明である。

前庭部の東西壁はA穴と違って羨道外壁との接触がルーズである。また閉塞石を離れるに従って急に東西壁の距離が縮まるように見える。しかも床面は閉塞石の下の半円状の丹彩のある部分の尖端付近から、 $\frac{1}{2}$ に近い勾配で上昇をはじめ。以上のことはこの前庭部が南側から門に向かって降りる「壙」の様相を呈していた可能性を示している。

前庭部に詰った土も、特異な様相を示していた。この土は地山の黄褐色ロームに少量の黒色の土が混入したもので、上部は攪乱を受けており、現在厚約1.2 mである。単なる流入土若しくは後世の埋め土にしては、その質が各層毎に著しく均一であり、この横穴の閉塞に関係する可能性が高いと考えられた。若しそうであるならば、各層の状況や、前庭部の削り込まれた様相は、3回以上の葬礼が行なわれたことを示すものであろう。

前庭部の調査が情況の許す限度で終了した後、閉塞石の様子を少しでも明らかにすべく閉塞石東半分の表面に接する部分の土を取りはずした際、床面からの高さ70～80cmのあたりから、土に混入した状況で計9箇のガラス玉が発見された。このことは前庭部に詰った土が横穴の閉塞に関係する可能性を更に高いものになっている。

以上をまとめると、B穴の前庭部は閉塞石に向かって降りてゆく袋状の壙の様相を呈したもので、穴を閉じる際にはまず閉塞石を立て、その周りを粘土で目張りし、閉塞石とその周辺に丹を施し、前庭全体に土を填めて完全に閉塞した可能性が強い、ということになる。なお前庭部填土中のガラス小玉は、意図的に封入されたものかどうか不明である。調査の実施に制約が多く、可能性の指摘にとどまったのは如何にも残念である。（渡辺）

IV. 出土遺物

[1]. A穴

1 昭和25年ごろの開口時に発見されたもの。(中村耕作氏蔵)

a. 刀子 (第8図の左、図版Vの下)

全長 123 mm。3片に折損したものを復旧してある。片面に他の遺物の一部が錆着しているが、全体として遺存状態はよい。スキタイ系の短剣にみるような曲身で、平峯の平造り。鋭利である。背厚は断面図のあたりで約 4 mm、尖より 1 cm 下りで約 2.5 mm。把の断面は円に近く、その尻から茎の端が突き出している。把の前端は明確な段落になって残っており、鞘の口らしき段落も残っていて、しかも後者が前者の上に 3 mm ほど重なっている。以上のことから、把がもう少し長く、いわゆる呑口式の拵えであったことがわかる。

b. ガラス小玉 (図版Vの中)

計76個。最大のもので長径11mm、短径8mm。側面形が提灯のような形のもの・太鼓形のもの・太鼓形で両端の面が特に平であるもの・ドーナツ形のもの・管玉形のものがあり、それぞれ造り方の相違ないし癖を反映しているようである。

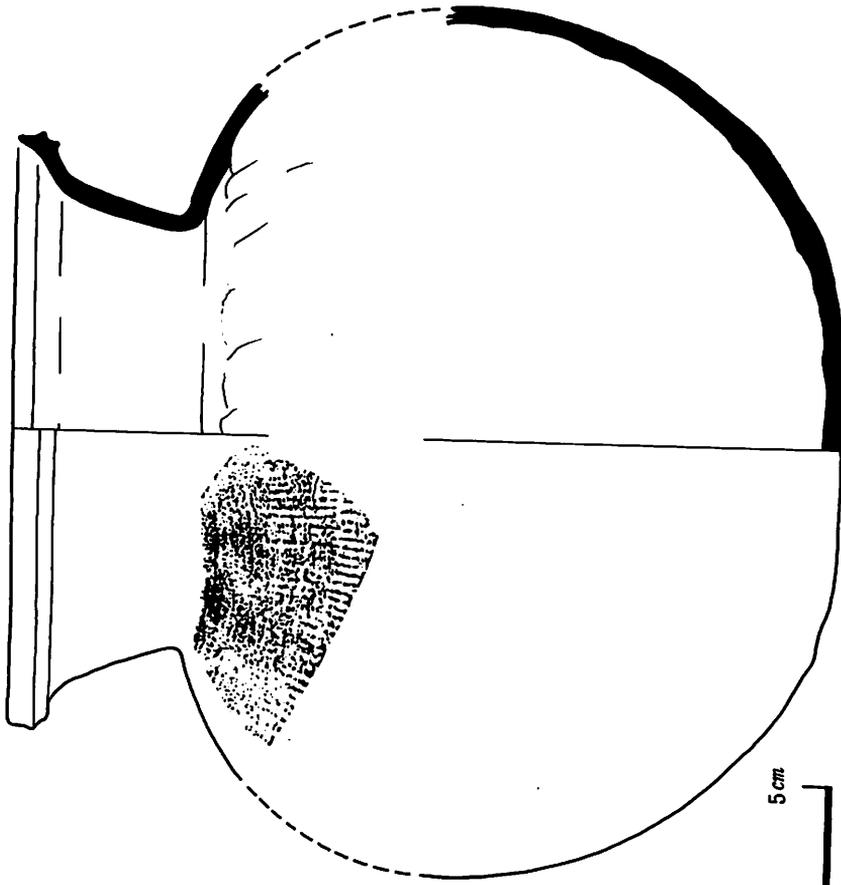
実験結果では、提灯形はガラスの温度が下りすぎたときに生じる。太鼓形で面の平なものには孔の両端に生じた突起を磨り取った痕跡が認められる。管玉形のはパイプをカットして、その断口を加熱によって丸めたものようである。なお大形品の多くは太鼓形で、ドーナツ形・管玉形は小形品である。

色調は変化に富んでいるが、濃紺色不透明・青緑色透明・赤褐色不透明の3種類に大別される。大形品のほとんどは濃紺色で、小形品の多くは青緑色である。赤褐色ガラスは写真最下列最後の1個だけで、古墳時代を通して比較的類例の少ない資料である。(三好)

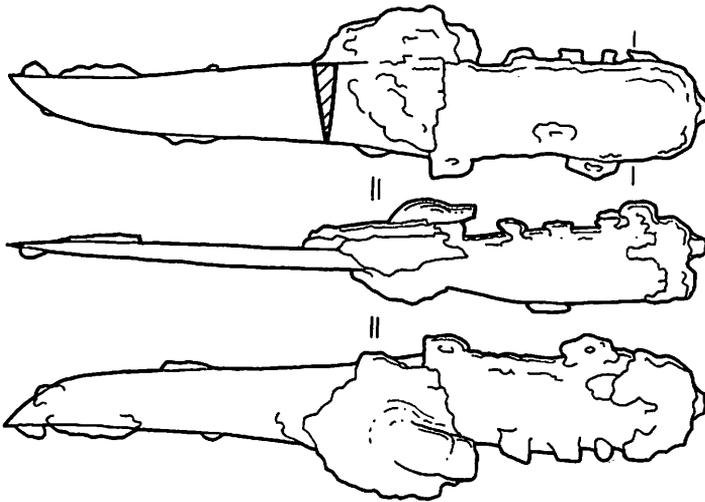
2 今回の調査によって発見されたもの

ガラス小玉計11個(図版VIの下の最下列)。うち10個は調査中の排土を水洗いして検出し、1個は玄室西南隅に近い床面から検出された。最大のもの、径7.5mm。濃紺色不透明7個、青緑色透明4個。各色とも大きさはまちまちである。

A墳出土のガラス小玉は大きさ・形・色調ともに変化がはげしく、一見多彩な感じ



B穴出土 須惠器壺



A穴出土 刀子

第8図 刀子・須惠器

を受ける反面やや雑多な印象をまぬがれ難い。製作技術の低劣に原因するか、あるいは入手の仕方に関係があると思われる。(新谷)

[2]. B穴

1 ガラス小玉(図版V)

玄室西南隅より発見されたもの87個(図版Vの下の上4列)、玄室の排土を水洗いして検出されたもの20個(図版Vの下第5列左の2個と第6列の18個)、前庭部の埋め土の中で発見されたもの9個(図版Vの下第5列右9個)、計116個である。

玄室内の107個には大粒のものがなく、全て中位以下の大きさである。色は濃紺色不透明・青緑色透明の二様である。填土中の小玉は1個が濃紺色の大粒のもので、他は青緑色で小さい。総じてA墳のものと同じように色調・形・粒の大きさなどが不揃いで、やや雑多な印象を受ける。

2 須恵器(第8図の右)

計6片。うち3片(底部・口縁部・胴部)は天井部が抜けて玄室内に陥入した土の表土に相当する部位より、1片(口縁部)は前庭部の填土中の上部より、2片(肩部・胴部)は填土真上の黒色土(表土の下)より出土した。

B穴前庭部が墓穴の閉塞に際して埋められたものであるとすれば、この須恵器の壺は嘗て玄室の真上に据えられていたが最終的な閉塞時にはすでに破損していた可能性が高くなり、二度以上の葬儀の実施が想定される。

器形は広口の壺で、高約24cm・胴幅約25.5cm・口径約17.6cm。破損しているにもかかわらず磨耗の痕は少ない。底は平たく歪んでいるが全体としては謹格である。頸部は短い逆八字形に開き、口縁部は更に外反しており、各稜の造り出しはシャープである。胴部外面には縦方向の叩き締め痕が一面に残されている。内壁のいわゆる青海波文は磨り消されているが、肩部の内壁に一部消え残っている。焼成は良好で、口縁部が鋭く、肩の張りがなく、青海波文を磨り消してあるなど、比較的古式の特色を保持している。頸部の平行沈線や櫛描き波文がないなどの曖昧な要素もあるが、5世紀にさかのぼる可能性を持つもののように見受けられる。(田中)

V. 御塚古墳群の時代

横穴は上古の墓制全体の中でも特に研究が遅れており、その性格についても不分明な点が多い。特に築造の時期の判定については、斜面を掘削して作る関係上構造に変異と曖昧さがつきまとい、しかも副葬品が貧弱であるので、これといった決め手を欠くのが普通である。

今回調査したA・B穴についても同様であるが、次のようにおおまかに推理することは可能である。

まずその構造についていえば、玄室の四辺の長さにあまり差がなく（つまり正方形に近い）、羨道がいちじるしく短小であり、天井は皿を伏せたような浅いドーム状を呈しており、壁との境に稜があるが特別な段落はない。これに似た形のもので、副葬品によっておおまかな時代が押えられる例が、大分市飛山横穴群、人吉市村山横穴群、球磨郡錦村京ヶ峰横穴群などの中に散見される。しかし飛山のものは玄室がやや縦長で天井は屋根形の印象が強く羨道も少し長い。村山横穴群中の該当例は奥壁と天井の境い目がなくて玄室全体がドーム状を呈しており、京ヶ峰の該当例は壁の上縁より天井の下縁の方が外側にあって屋根のひさしを表現している。つまり3者それぞれ御塚例と小異があるが、その中では飛山例とのへだたりが一番大きく、京ヶ峰・村山の方に近い。両例とも肥後の例であり、その時代は出土した須恵器によって7世紀半頃に近いと推定されている。形態だけから推定すれば御塚横穴群の築造時期もこれに近いと思われる。

cf. 佐田茂「九州横穴の形式と時期」 考古学雑誌 61 巻 1 号 昭50.

しかし、前節で述べたB穴の須恵器の壺の年代がこの際あらためて問題になる。この壺は天井の真上に据えられていたと考えられるもので、墓の掘削に先立って置かれた該然性は極めて低く、最初の埋葬以後に置かれたとするのが穏当である。この場合仮りに壺の製作年代を5世紀末としてB穴の掘削の時期を京ヶ峰・村山に並べようとするれば、今度は壺がB穴の上に据えられるまでの100年以上の時間の経過が問題になる。傍証が少なく、しかも不確定要素が多すぎるが、上記の穴の形態からの推定を若干さかのぼらせる必要を感じる。しかし今回のところ「紀元600年を更に遡る可能性」だけを示しておくことにしよう。本調査は、どちらかと言えば不確定要素の多い調査である。確定的なことは保存状況のよい横穴の調査例の増加に期待する他にない。

（平野）

Ⅵ. まとめ

以上の所見をまとめると次のようになる。

①御塚横穴群は、他の横穴群が一般的に占地する崖状地形乃至それに近い急斜面ではなく、比較的緩傾斜面に立地している。

②御塚横穴群は、東西方向に上下2段にわかれ、少なくとも10基以上の、羨道部を南に向けた横穴の群によって構成されている。

③調査対象であるA・B両穴においては、墓室の外を小円墳状若しくは台状に整形した可能性がある。

④A・B穴とも方形のプランで、屋根が退化した浅いドーム状の天井と短小な羨道を持ち、閉塞石・前庭部を具えた型のものであり、未調査の他の穴も同様な型のもと思われる。

⑤その築造の時期は通説より著しくさかのぼる可能性があるが、現在のところ調査例の増加に期待する他にない。

⑥A・B両穴とも一般の例をはるかに凌駕する多量の丹が使用されており、壁・天井は粘着剤を混ぜて塗布されたものであり、床面のものは葬儀もしくは祭礼の度に撒かれたものようである。

⑦B穴は葬礼後の閉塞の際、閉塞石で閉じた後、更に前庭部に土を填めて閉塞した可能性が極めて強い。A穴も同様の可能性を持つものである。この場合、横穴に対する従来の理解のままでは地上の標式がいかに微弱である。前記⑤に対応する事柄と考えたい。

⑧出土品は特に目立つものはないが、ガラス小玉の種類が雑多である点は、被葬者集団の性格の一部を示すものであるかも知れない。

(以上)